

テレノベラ El clon における麻薬中毒者の 表象とその背景 ——ナタリア・フェレルの転落と更生を中心に——

野内 遊 水戸博之

キーワード：テレノベラ、ラテンドラマ、ラテンアメリカ、メディア、ブラジル、スペイン語圏、麻薬、コカイン

0. 序

本稿は、科学研究費補助金交付研究「スペイン語・ポルトガル語近親言語文化間の外国語教育と相互理解の諸相」の一分野として執筆されたものである¹。本稿では、ブラジル及びスペイン語圏における社会的相互作用・相互理解のツール（媒体）としてのテレノベラに焦点を当てる。いうなれば、テレノベラの持つ社会的機能の働きについて焦点を当てるものである。テレノベラとは、この地域で制作されるテレビドラマのジャンルの総称である。具体的には、二大言語文化圏に共通する深刻な麻薬問題が、テレノベラにおいて、どのように表象されているのかを分析することによって、近接しながらも異なる言語文化が、南北アメリカ大陸の空間的広がりの中で、いかに包摂され相互理解が行われているかの諸相を考察することである。

ここでは論考の進め方として、最初に作品自体の主要なテーマと社会的メッセージとの関係を概略的に示した上で、社会的背景としての現実の麻薬問題、メッセージの発信者であるラテンアメリカのメディア産業とテレノベラ、作品に描かれる麻薬問題の各項目をこの順に分析していく。

1. 作品 El clon と三つのテーマ

El clon には、大きなテーマが三つある。クローン技術、宗教（イスラム教とキリスト教）、麻薬乱用である。これらは、第一に、主人公の一人であるドラマのタイトルにもなっているクローン人間の誕生と生命倫理、成長後の認知をめぐる法的係争、第二に、イスラム教徒のヒロインがクローンに20年前の許されぬ恋人の面影を追い、二つの異なる世界の間で翻弄される姿、そして、第三に、麻薬乱用である。第三の若者を中心とした麻薬に苦しむ人々とその家庭の姿は、ドラマ本来の主人公たちと同等以上に、とくにテレノベラの後半部分では、非常に重要なテーマとなっている。

オリジナルのブラジル版が、他のテレノベラ作品と同様、単に多くの国々へ商業的に輸出されただけでなく、さらにスペイン語版が制作されたことの意義は、極めて注目すべき事柄であると思われる。個々に国ごとに見れば様々な差異は見られるが、ブラジルとスペイン語圏における文化的・社会的問題の共有は、例えば上述のような、クローン技術に代表される先端科学が社会へもたらす影響や、異なる宗教間の接触と移動、薬物依存といった大きな観点からみると、単に言語や歴史的背景が近いということにとどまらない、両地域の近親性の諸相が確認できるのではないだろうか。

本稿では、El clon で描かれている麻薬乱用について焦点を当て、テレノベラの訴えるメッセージ、すなわち麻薬中毒者の描かれ方の背後にある社会的病理としての薬物汚染の危険性への警告、そして麻薬撲滅への願いを解説する。このような作業は、両地域の近接性の諸相の確認であると同時に、テレノベラの持つ社会的機能の一端を明らかにする作業であるともいえるだろう。

2. 南北アメリカにおける麻薬問題の特徴

まず、麻薬問題の概略について整理を行いたい。現代において麻薬汚染は社会的病理であるといえる。犯罪をはじめ多岐にわたる社会的不安定さの要因ともなりうる。麻薬は世界中に蔓延しており、世界で2007年1億7千200万人から2億5千万人の人々が、その前年に一度でも違法薬物を摂取したと推定されている (Oficina de las Naciones Unidas contra la Droga y el Delito 2009 : 14)。

麻薬問題においては使用薬物に地域差が見られる。本研究の対象となるテレノベラ El clon は、はじめ2001年ブラジルで制作放映され (原題 O clone)、2010年マイアミを舞台にリメイクされたスペイン語版である。そこで描かれる薬物依存者は、コカイン中毒者たちである。コカインは、コロンビア、ボリビア、ペルーの南米三カ国においてのみ植生しているコカの葉から生成される麻薬である。コカインは、主に南北両アメリカ大陸で蔓延しているが、他方、アフリカ・アジアでは、相対的に推定使用者数が少ない (Appendix 1 を参照)。

北米・南米を合計した近年のコカイン使用者数は、950万人前後であったと推定されている (Appendix 2 を参照)。El clon では、富豪フェレル家の将来を嘱望されたナタリアが、はじめ大麻を吸引してから、次第にコカインにのめりこんでいく状況が克明に描かれている。大麻とコカイン、これら二つが全アメリカ地域における主要な麻薬であり、多くの社会問題の原因である。

大麻とコカインを比較すると問題が深刻となるのは、やはりコカイン使用者の方であろう²。コカインの持つ最大の問題点は、その依存性の強さである (Appendix 3 を参照)。和田清によると、依存の概念には、精神依存 (psychological dependence) と身体依存

(physical dependence) の二つがある。

身体依存は、アルコールを例にとると、最初は少量のアルコールで酔いを体験するが、そのような経験を繰り返すうちに「慣れ」が生じ、同じ効果を得るためには、摂取量の増加を要求するようになる。この「慣れ」とは「耐性」と呼ばれるが、言わば「耐性」と「摂取量増加」の悪循環が依存の始まりとなる。身体依存の場合、ある薬物が身体に入っているときには、さほど問題が生じないが、体内薬物濃度が低下、いわゆる「切れてくる」と、手のふるえなど、様々な禁断症状が発生する依存状態である。

一方、精神依存においては、摂取薬物が切れても、身体的不調や変調は通常顕在化しない。本質的には渴望 (craving) という薬物を欲求する気持ちが極度に亢進する状態である。言い換えれば、薬物の摂取を「断て」といわれても「断つことができない」状態である (和田 2000 : 4-5)。

El clon では、まさに「断て」、「断たなくては」と自分ではわかっているが、「断つことができない」という精神依存の苦しみと葛藤が、登場人物たち、とくにナタリア・フェレルを通じて描かれている。コカインに苦しむ中毒者たちの姿、それが El clon の一つのテーマであり、このテレノベラを単なる娯楽作品以上のものとしていると考えられるのである。

3. ラテンアメリカにおけるメディア企業とテレノベラ

3.1 ラテンアメリカにおけるメディア企業の役割と社会状況の変化

テレノベラの考察に入る前に、ラテンアメリカ地域におけるメディア企業の役割とメディア企業をとりまく社会状況の変化について概観しておこう。言うまでもなく現代社会においてメディア企業の果たす役割は大きい。とくにラテンアメリカ地域において特徴的なこととして、主要なメディア企業が権威主義的な政治体制と密接な関係にあったことが指摘できる。

例えば、ブラジルにおける Globo と軍政の関係、メキシコにおいては Televisa と 1929 年から 2000 年まで一党独裁体制を続けた PRI (Partido Revolucionario Institucional) との関係を挙げることができる。すなわち「政治」とメディアが、相互に協力し合い支配体制を維持して来たと言えるのである。他方、単純に政治体制の維持に加担していたというだけではなく、もはや古典ともいえるベネディクト・アンダーソンによる『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』を例に出すまでもなく、「国民国家」の共通意識を生み出す装置としてのメディアの役割を無視することはできないだろう。後述するように、テレノベラもそのような役割の一端を担うるのである。

現在では、かつてラテンアメリカを支配した軍政や一党独裁の時代は終わり、民主化・

自由化の流れが進行しているが、その過程で新興勢力のメディア企業と従来から存在していた支配的メディア企業の間で熾烈な競争、主として視聴率をめぐる戦いが行われ、そして今も行われている。新興メディアの台頭は、従来の政治体制と主要なメディアの関係が崩れていく過程で、生じたものであったが、その新興勢力の原動力となったのがテレノベラであった。新興メディアは、従来のアプローチとは異なるプロットの作品を制作し、加えて他国とくに近隣のラテンアメリカ諸国制作のテレノベラを購入放映することによって、支配的メディアから視聴者たちを奪っていった³。テレノベラは商業作品であることはいうまでもないが、単なる商業作品ととらえるには、多様な側面を兼ね備え、社会に大きな影響を及ぼす機能を持っているともいえるのである。

3.2 テレノベラに関する先行研究

El clon は、2009年にアメリカ合衆国のマイアミに本拠地を置いている Telemundo とコロンビアの RTI (Radio Televisión Interamericana)、そしてブラジルの Globo によって制作・放映されたテレノベラである⁴。なお、テレノベラの制作・輸出では、これらの三社の他、メキシコの Televisa、アルゼンチンの Telefe (Televisión Federal S.A.)、コロンビアの RCN (Radio Cadena Nacional) などが有名である。

テレノベラの一つの特徴として、もともとはアメリカ合衆国のラジオドラマやソープオペラの影響を受けながらも、各国の文化をとり入れる形で発展して行ったことを挙げることができる。例えば、メキシコのテレノベラは、とくに Televisa によるテレノベラは、他国で制作された作品と比較して、より感情に訴えかけ、より劇的で、多くの場合「歴史」・「社会」とは無関係な物語が多い。すなわち、それぞれのテレノベラは舞台となる場所を設定するが、メキシコのテレノベラの場合、その場所や時代は特定されない場合が多いことを挙げることができる。コロンビアのテレノベラは、コメディやアイロニー的な要素が多いと言われている。ベネズエラのテレノベラは、感情に訴えかけるものであるが、メキシコの作品ほど装飾的 (baroqueness) ではない。ブラジルのテレノベラは、最も現実的で、歴史的な文脈を踏まえたものが多い。また、メインのストーリーに加えて、サブのストーリーが並行して展開する (Straubhaar 2010: 11-12) (Barbosa 2005: 16)。クローン技術に加えて、様々なストーリーが展開されている El clon は、このようなブラジルのテレノベラの特徴を引き継いだものであるといえる。もちろん、上述の各国におけるテレノベラの特徴はあくまでも大まかな分類である。ブラジルの SBT (Sistema Brasileiro de Televisão) の場合のように、他国で制作されたテレノベラを自国で放映することも多い。また、2001年から2003年まで、コロンビアで放映され、人気を博した Pedro el Escamoso のように、既存のテレノベラに多くみられた女性が困難に立ち向かい、涙を流すといった構図を逆転させ、男性 (主人公である Pedro) がそのよ

うな役割を担うという作品も存在する⁵。

重要なのは、テレノベラというジャンルが、ラテンアメリカ地域において各国社会の特徴を維持しながらも、共時的に発展していったことである。先行研究において、例えば、ある国のテレノベラの発展の歴史を見る際、とくに革命前のキューバ、ブラジル、アルゼンチン、メキシコの影響を必ず言及することが端的に示しているといえる。もちろん、このような共時的な発展は、文化的側面という点だけではなく、後述するように、テレノベラの持つ商業的側面も大きく関係している。もともと、テレノベラの黎明期から、各々の国が影響を受ける形でテレノベラの輸出入はおこなわれていたが、「グローバル化」の進展により、近年この地域におけるテレノベラの輸出入がさらに盛んになっている。その背景には、近隣諸国間の交流がより活発になったことと共に、企業間の競争の激化という側面も存在する。とくに各国の第2位、第3位のメディア企業は、首位に対抗するため、積極的に他国のテレノベラを受け入れている。Telemundoもアメリカ合衆国第2位のスペイン語メディア企業である⁶。

このような状況をふまえて、テレノベラに関する先行研究を概観してみる（刊行年・出版社等は、参考文献一覧を参照）。

テレノベラに焦点を当てた研究には様々なアプローチがある。ここでは、El clon がもともとブラジルで制作されたテレノベラであることをふまえ、ブラジルに関係した先行研究に焦点を当てることにする。まず、Esther Hamburgerによる*O Brasil Antenado*のように、テレノベラの歴史を考察したものがある。また、メディア産業の変化そのものに焦点を当てたものとしては、例えば、Cacilda M. Rêgoによる“From Humble Beginnings to International Prominence: The History and Development of Brazilian Telenovelas”のように、ブラジル社会の変容と国内最大のメディア企業であるGloboの変化を扱ったものがある。そして、その過程の考察においては、スペイン語圏のメディア企業とのテレノベラの輸出入の関係も触れられている。また、Nico Vinkによる*The Telenovela and Emancipation - A study on TV and Social Change in Brazil*のようにテレノベラがブラジル社会に与える影響について焦点を当てたものもある。

テレノベラにおいて表象される様々な社会集団も重要なテーマである。例えば、Lúcia Helena Rincón Afonsoは、*Imagens de Mulher e Trabalho na Telenovela Brasileira (1999-2001)*の中で、テレノベラにおける女性の描かれ方に焦点を当てている。Joel Zito Araújoは、*A negação do Brasil: O negro na telenovela brasileira*でアフリカ系住民の表象について考察をおこなっている。

El clonに関しては、Elizabeth Barbosaによる*The Brazilian Telenovela “El Clon”: An Analysis of Viewer’s Online Vicarious and Virtual Learning Experiences*がある。Barbosaは、インターネット上でのオープン・フォーラムにおいて、視聴者たちから寄せられた

イスラム文化に関する投稿、多くの場合、「誤った」イスラム像に対する視聴者のコメント、そのコメントに対する他の視聴者たちのコメントの相互関係を分析している。このようにテレノベラにはすでに多くの先行研究が残されている。本論文では、これらの先行研究をふまえた上で、El clonにおける麻薬問題の表象に焦点を当てるものである。

4. テレノベラの持つ多重的価値 - コンテンツの商業性とメッセージ性

本節では、テレノベラのコンテンツが持つ二重の発信力について注目する。テレノベラの持っているメッセージ性を考察する際、この点を正確にとらえるためには、まず、テレノベラの持つ商業的発信力の側面について認識する必要があるだろう。もともと、テレノベラそして、テレノベラのもととなったラジオノベラの制作におけるスポンサーとなったのは、Colgate - Palmoliveのような歯磨き・石鹸・洗剤メーカーであった。アメリカ合衆国での「ソープオペラ」における手法、すなわちスポンサー企業の消費者である主婦層を視聴者に想定し、その嗜好に沿った番組制作が、まず、革命前のキューバで、そしてブラジルなどの国々に取り入れられていった (Barbosa 2005:15) (Strausbaar 2010:3)。今日、ラテンアメリカ諸国で制作されたテレノベラが世界各国に輸出されている状況は、単に国内向けの娯楽作品であるばかりでなく、作品自体の輸出も視野にいれたコンテンツとしての側面を端的に示しているといえる。

このような商業的側面に加えて重要なのは、テレノベラの持つ啓蒙的役割である。必ずしも全てに当てはまるわけではないが、いくつかの作品はある種のメッセージを発信しているといえる。例えば、2009年にアメリカ合衆国で放映されたテレノベラ *Más Sabe el Diablo* では、2010年の国勢調査のプロモーションをおこなうために U.S Census Bureau と Telemundo が協力し、メインキャラクターの Perla Beltran が、U.S Census Worker として働くエピソードが、数回にわたり放映された (Castaña 2011:3-4)。さらに、社会・コミュニティの融合を促進する機能もある。ブラジルを例にとると、広大な国土を持つブラジルでは、アマゾンに住む人々からサンパウロの高級住宅に住む人々に至るまで、様々な社会的背景を持つ人々が、テレノベラを通じて共通の話題を持つことが可能である。また、テレノベラの筋や登場人物の行動を通じて視聴者に社会的規範や、社会の直面している現実や問題に対する意見や行動モデルなどを提供することもできる (Rêgo 2011:76)。El clon のオリジナル版であるブラジルで放映された *O clone* (2001年10月-2002年6月) は、単にエンターテインメントとしてだけでなく、上述の社会規範や宗教、社会問題を視聴者たちに投げかける内容となっていた。

本論文では、特にテレノベラの持つ社会的メッセージ性に焦点をあてている。なぜなら、ドラマ El clon のストーリーにおいて、ブラジル、ラテンアメリカ諸国、「ラテン系住民」の増加しているアメリカ合衆国が共有している社会問題である麻薬の持つ恐怖、

そして麻薬撲滅へのメッセージが強く訴えられていると考えられるからである。

5. El clon に描かれているブラジルとスペイン語圏の文化的・社会的近接性

ブラジルとスペイン語圏の文化的・社会的近接性は、よく知られている。この近接性の背景として、ポルトガル語を公用語とするブラジルとスペイン語圏であるラテンアメリカ地域における物理的・言語的・文化的近接性を挙げることができる。そして、この地域が歩んできた歴史、社会状況にある種の共時性も見られる。また、ブラジル、そしてラテンアメリカ地域は、国民の多くがカトリック教徒であることが知られている。必ずしも全ての人々が熱心な信者というわけではなく、近年プロテスタント系の増加が見られるが、主要な宗派はカトリックである。この地域は、広義のキリスト教文化圏であり、社会的規範や文化的タブーなどを共有しているといえる（ブラジルにおける主要な宗教の信者数については Appendix 4 を参照）。

もちろん、これは、個々の国々、社会における差異・特徴が存在していないということと主張するものではない。そのような差異・特徴の上に共有している認識が、言わばメタ的に存在していると思われるのである。

その一つが、そして、El clon の中に雄弁に描かれているのが、西洋文明の一員であるという認識であり、オリジナル版の O clone において議論を引き起こしたイスラム文化の描かれ方であるといえる。この点に注目し論じたのが、第3節で触れた Elizabeth Barbosa による研究である。物語の中では、キリスト教とイスラム教というよりも、イスラム教徒を演じる登場人物から頻りに発せられる ¡Occidental! (西洋人!) という言葉に象徴される西洋とイスラム世界との差異が描かれている。物語としての El clon のさらに興味深い点は、宗教や倫理といったラテンアメリカ地域にメタ的に共有されている意識と麻薬問題といった現実的に共有されている問題が、同時に、そしてうまく編みこまれているところにあるといえる。

6. El clon における主要なテーマ

El clon は、全 184 回で構成されている。テレノベラは、一般に 120 回から 180 回で構成されている。ブラジルでは、月曜日から土曜日まで毎日、スペイン語圏では、月曜日から金曜日に毎日放映されている。放映回数の多さからもわかるように、一つのテレノベラでの扱われている時間軸は非常に長いものが多い。El clon においては、約 20 年の月日の中で、物語が進行している。

多くのテレノベラと同様に、El clon は、主にマイアミ⁷を舞台にして男女の関係をテーマとしている（主要な登場人物のプロフィールについては、Appendix 5 を参照）。El clon では、イスラム教徒の女性とキリスト教徒の西洋人男性の関係を軸として話が展開して

いく。El clon では、宗教の違いに加えてクローン技術が、その男女関係の中に入り込んでいくところに特徴があるといえる。それは、成長したクローンであるダニエル（20年前の主人公であるルーカスの姿をした）と20年の年を経たルーカス、そしてヒロインであるハーディを巡るいさかいであり、ハーディの彼ら二人に対する感情の揺らぎなどである。このような男女関係だけでなく、ダニエルとともに、ルーカス自身のクローンに対する自らの存在意義に対する苦悩が何度も描かれている。

他方、クローン技術やイスラムに対するものと比較して、麻薬中毒者を描く姿勢は、明確である。クローン技術は、タイトルにもなっているように、テレノバラ全体を貫くテーマである。しかしながら、クローン技術に対する倫理的判断の是非については、曖昧なままである。最終的には、クローンであるダニエルとダニエルを生み出した科学者であるアリビエリは、サハラ砂漠を放浪し、その後の行方がわからないままで終わる。イスラム教徒の描かれ方も、西洋人と比べて伝統を忠実に重んじる人々として描かれている。そして、伝統を重んじるゆえに、西洋人との差異が際立ってしまうという以上には描かれてはいない。

それに対して、麻薬問題に対しては、はっきりとしたメッセージを二つ出している。一つは、コカイン乱用の危険性であり、もう一つは、治療入院の重要性、とくに中毒者本人の意思がなければ、親権者であっても強制的に入院させることはできないという点である。ナタリアは、この二つのメッセージを体現する存在であるといえる。

7. 麻薬中毒者及び物語の軸としてのナタリア・フェレルの描かれ方

麻薬問題は、富豪フェレル家の後継者である主人公ルーカスの娘ナタリアを軸に展開していく。ナタリアは、麻薬中毒者の象徴として描かれている。その軸となっているのが、コカイン中毒における精神依存の強さであり、中毒者本人だけでなく、その周りの人々が直面する困難である。El clon では、そのような状況が繰り返し描かれているのである。

ナタリアは、ルーカスとマリサの間に生まれた。ルーカスは、ハーディとの結婚を望んだが、宗教的な違いや周囲の反対、様々な不運により、ハーディとは結婚することができなかった。もともとルーカスの双子の兄弟であり、ヘリコプター事故で亡くなったディエゴの恋人であったマリサと結婚し、ナタリアが生まれた。マリサには、幼少時に失踪した麻薬中毒者の母がおり、その後、彼女は様々な場面で、浮浪者の女性に母親の影を追い求め続けている。このことは、後半部分において、マリサが娘に対する入院治療に踏み切れず、自分自身で問題解決を試み苦闘する伏線となっている。

ナタリアが物語に登場するのは、ルーカスとマリサの子どもとして誕生する第35話である。そして、徐々に物語の重要な役割を担っていくのは、思春期以降の第75話以降で

ある。上述のように、ナタリアは、El clon において、麻薬中毒者の現状を訴えるという役割を与えられている。

一方、彼女はテレノベラの軸となる主人公であるルーカスとハーディの恋愛関係においても重要な意味を持つ存在である。ルーカスは、ナタリアという実の娘のために、全てを捨ててハーディとの生活に踏み出せないでいる。そして、それにいら立つハーディの行動、とまどうルーカスの姿が中盤以降の物語の軸となっている。

中盤以降において物語のポイントとなるのは、ナタリアが麻薬を使用するに至る過程である。とくに大きく作用するのは、恋人である彼女専属の運転手アレハンドロとの交際を家族に反対されるという状況である。しかしながら、それ以外にも、祖父であるレオナルドが自身の息子であり、ナタリアの父親であるルーカス以上にナタリアに寄せる過大な期待、また父親の重荷になっている自分の存在、さらに自分の存在により不仲となっている両親の関係を認識することなど、麻薬に依存する原因となる様々な状況が描かれている。

物語のテーマであるクローン技術・イスラム文化・麻薬問題を並列すると、クローン技術とイスラム文化は、宗教もしくは宗教的倫理という点で容易に結びつくが、麻薬問題は他の二者に対して異質にうつる。初期の回において、後述するエンリケ弁護士が宗教に救済を求め薬物依存から更生したという台詞も見出されるが、ドラマ全体では宗教とは切り離された日常の問題として、麻薬を物語全体にうまく組み込んでいるのがナタリアの存在である。少なくとも、ナタリアの存在なしには、中盤以降の物語は成り立たないといえる。

麻薬問題に関して、注目する必要があるのは、ナタリアだけではなく、彼女の友人、麻薬中毒者たちの存在である。友人として登場するのは、フェルナンドとパウラである。フェルナンドは、ナタリアの祖父が経営している企業の従業員であるクララの息子である。パウラは、フェルナンドの恋人で、自身の麻薬問題が原因で両親が離婚し、また家族とは絶縁状態にある。既に述べたように、ナタリアは、富豪であるフェレル家の孫娘である。もし仮に、ナタリアのみを麻薬中毒者として描くならば、結局それは上流家庭の子女の麻薬問題という枠組みで物語が完結してしまうだろう。ところが、ナタリアが、麻薬へと傾倒していく過程で、フェルナンドとパウラとナタリアの三者が麻薬仲間として親密になり、さらに麻薬購入資金を得るために、共謀して強盗などの犯罪行為をおこなう描写、売人のアジトに麻薬購入代金の不払いから監禁される描写、家族・友人がその代金を払うまで解放されないという描写は、社会階層を縦断した問題、つまり誰にでも起こりうる状況であることを視聴者たちに訴えているといえる。

本稿の冒頭で述べたように、南北アメリカ大陸における麻薬問題は根が深い。汚職、暴力の拡散による社会不安など、非常に広範に連なっている。El clon は、その中でも、

麻薬使用者そして彼/彼女の周囲の人間の状況に焦点を当てている、言い換えるならば、親に対する暴力や家庭崩壊などのよりミクロな麻薬問題に焦点を当てているところに最大の特徴があるといえる。このように、テーマを限定しているところが、上述したような、他の二つのテーマと麻薬問題をうまく融合させえた要因であると考えられるのである。

ここから具体的に、麻薬中毒者の描かれ方についての考察をおこなう。

El clon における麻薬中毒者の描かれ方の一つの特徴として、彼らの描写がある種パターン化されて描かれている点を挙げるができる (Hamburger 2005:134-135)。パターン化された表現とは、かつて麻薬中毒者であった、フェレル家の顧問弁護士の一人エンリケが、麻薬中毒者の苦しみを、自身の専属医に言葉で表現するカウンセリングの場面が度々挿入され、そして次のシーンでは、ナタリアが、エンリケの言葉をなぞるように、麻薬の禁断症状を起こし、麻薬を買うために犯罪をおかすというシーンが挿入される。

El clon における麻薬中毒者の描かれ方のもう一つの特徴として、麻薬問題は、個人の問題としてだけではなく、家族・周囲の人間も含めた問題として位置付けられていることが挙げられる。例えば、麻薬中毒者となったナタリアを軸に描かれる物語は、彼女だけでなく、恋人・家族を巻き込む形で進んでいく。またそれは、フェルナンド、そしてパウラの物語も同様である。

例えば、パウラは、家族と絶縁状態にある。彼女が、麻薬を買うために自宅の家具を売り飛ばしたことや、彼女の行為がきっかけで家庭内でのトラブルが多発し、両親が離婚してしまった。パウラは、両親から完全に拒絶されている。盗みが発覚して父親の家へと突き出されたとき、当の父親から拒まれ、警察に強盗容疑で捕まった時も、警察署へ呼び出された母親はパウラに対して極めて冷淡な態度を見せた。公園などで寝泊まりし、売人に拉致された時、両親から身代金を払ってもらえず、最後には行方不明となるパウラは、麻薬が家族・周囲の人間との関係に与えるおそろく最悪の事態を象徴的に表し、最も厳しい描かれ方をされている。

フェルナンドは、フェレル家の会社の従業員であるクララの息子である。もともと、音楽バンドに所属していたが、パーティーなどで麻薬を覚え、徐々にのめりこんでいき、バンドの練習にも参加しなくなり、解雇される。その後、所属していたバンドが成功したことを知り、自身の現状とかつての仲間との落差に悩み、さらに麻薬に依存するようになる。そして、パウラやナタリアと共謀し、強盗や、フェレル家への窃盗の手引きをおこなうようになっていった。フェルナンドの場合も、家族との関係は詳細に描かれている。一緒に住んでいた母親であるクララとの関係、母親と自分を捨てて愛人のもとへと走った父親であるエスコバルとの関係である。とくに母親であるクララは、フェルナン

ドが家財道具を盗んだり、来客の財布から現金を抜き取ったりすることにより、多くの苦しみを受ける。その結果、再婚相手と考えていた恋人とも一時的に別れることとなった。フェルナンドは、最終的に更生することに成功する。

ナタリアは、パウラやフェルナンドに比べると、その転落の過程そして更生の道のみが詳しく描かれている。とくに家族・周囲の人間との関係という観点でいうと、両親や祖父との関係と共に、恋人であるアレハンドロとの関係は、非常に重要である。アレハンドロは、何度もナタリアに麻薬を止めるように言う。ナタリアは、その度に麻薬を止めるという約束をアレハンドロへとする。しかし、その約束は決して守られることはない。そのため、アレハンドロは、ナタリアに対して一時的に、距離を置くことを提案する。ナタリアは傷つくが、それはアレハンドロも同様である。父ルーカス、母マリサ、そして祖父レオナルドもナタリアに何度も裏切られることになる。

少なくとも、El clon では、転落の過程そして更生へと踏み出そうという過程において、麻薬中毒者自身そしてその周囲にいる人間も非常に大きな困難に直面することが描かれている。そして、更生への過程も容易ではない。上述したように、本人の同意がなくては、治療施設に入ることができない。ナタリアが最終的に治療施設に入り、本格的に治療を始めようとしたのは、アレハンドロとの子の妊娠が分かってからである。その時ナタリアは二度目の妊娠であった。一度目の子どもは、ナタリアの麻薬中毒が原因で流産してしまった。二度目の妊娠と出産において、当初子どもはやはり薬物の影響から危険な状態で生まれてきたが、危機を乗り越え無事に成長を続ける。

このようにナタリアの転落から更生へと至る過程は、多くの紆余曲折を経ている。最も重要な点は、家族・周囲の人々の支え、そして自分自身が更生への意思を示すこと、これら二つがそろってようやく更生することができたということである。ナタリアの物語はハッピーエンドで終わった。またフェルナンドも更生に成功した。フェルナンドにも家族の支えがあったのである。しかしながら、パウラのように行方知れずのままで結末を迎える物語もある。パウラの悲劇は、家族の助けを得られなかったことによる。彼女について一つ救いと言えるものがあるとすれば、最終回においてパウラの名前を冠した薬物依存の更生施設が開所されるシーンであろうか。ナタリア、フェルナンドとパウラの物語は対をなしているといえる。そのような構図の背後には、本人の意思だけでなく家族・周囲の人々の支えの重要性を訴えているメッセージを読み取ることができる。

8. 結論

本論文では、テレノベラの持つ多重的価値のひとつであるメッセージ性に注目した。具体的には、南北アメリカ大陸に蔓延している麻薬に対する強いメッセージである。実際、ラテンアメリカ地域において麻薬問題は深刻である。El clon は、そのような状況に

ある地域で制作された作品であり、そのような状況にある社会であるからこそ広く受け入れられたといえる。無論、麻薬問題という社会の負の側面において、共通認識が存在しているという点は喜ばしいことではない。他方、テレノベラという商業的・文化的媒体が、一つのツールとして機能し、ブラジルからアメリカ合衆国までの広大な地域へ共通のメッセージを発信し、大きな影響力を持っているという点は、この地域のメディア文化の最大の特徴であり、肯定的な側面を見れば強みであるといえる。テレノベラは単なる大衆娯楽だけではなく、広範囲にわたる地域に住む人々の相互理解、そして問題の共有のためのツールとしての役割を果たしているのである。El clonにおけるナタリアは、そのようなテレノベラの持つ役割を象徴的にあらわす存在であるといえ、誰もがナタリアになりうる可能性を、テレノベラを通じて訴えているともいえる。それだけに、私たちはその重要性を認識する必要があるといえる。ナタリアの役割を認識した上で物語をふりかえれば、このテレノベラの持つ内容の多層性における、麻薬撲滅に対する強いメッセージ性が浮かび上がってくるだろう。それは同時に、南北アメリカ大陸が直面している麻薬問題の深刻さを私たちに訴えかけているといえる。

Appendix 1 2007年における地域別の麻薬治療者の割合

地域	薬物 1	薬物 2	薬物 3	薬物 4	薬物 5
南アメリカ	コカイン 52.1%	大麻 33.2%	覚せい剤 10%	その他 3.1%	アヘン 1.7%
北アメリカ	コカイン 33.5%	大麻 23.3%	アヘン 20.7%	覚せい剤 17.8%	その他 4.7
ヨーロッパ	アヘン 59.7%	大麻 19.5%	覚せい剤 10.9%	コカイン 8.4%	その他 1.5%
アジア	アヘン 64.6%	覚せい剤 17.8%	大麻 10%	その他 7.4%	コカイン 0.3%
アフリカ	大麻 62.8%	アヘン 16.5%	コカイン 7.2%	覚せい剤 5.1%	その他 8.4%
オセアニア	アヘン 47%	大麻 26.3%	覚せい剤 19.8%	その他 6.5%	コカイン 0.4%

(出所) Informe Mundial sobre las drogas 2009, Oficina de las Naciones Unidas contra la Droga y el Delito, 2009, 16.

Appendix 2 南北アメリカ大陸における推定麻薬使用者数

麻薬	推定使用者 単位 (人)
大麻	41,450,000-42,080,000
コカイン	9,410,000-9,570,000

覚せい剤	5,650,000-5,780,000
アヘン	2,190,000-2,320,000
エクスタシー	3,130,000-3,220,000

(出所) Informe Mundial sobre las drogas 2009, Oficina de las Naciones Unidas contra la Droga y el Delito, 2009, 17.

Appendix 3 精神作用物質の心身に及ぼす作用の特徴

	精神依存	身体依存	耐性	催幻覚	精神毒性
あへん類 (ヘロイン, モルヒネ等)	+++	+++	+++	-	-
アルコール	++	++	++	-	+
大麻 (マリファナ, ハシッシ等)	+	+-	+	++	+
コカイン	+++	-	-	-	++
アンフェタミン類 (メタンフェタミン, MDMA 等)	+++	-	+	- MDMA では +	+++
LSD	+	-	+	+++	+-
ニコチン (たばこ)	++	+-	++	-	-

(出所) 和田清, 『依存性薬物と乱用・依存・中毒』, 2000, 14.

Appendix 4 ブラジルにおける各宗教の信者数 (単位: 人)

総数	169,872,856
カトリック (Católica apostólica romana)	124,980,132
福音主義 (Evangélicas)	26,184,941
スピリティズム (Espirita)	2,262,401
ウンバンダ・カンドンブレ (Umbanda e candomble)	525,012
その他の宗教 (Outras religiosidades)	3,044,013
イスラム (Islamismo)	27,239
無宗教 (Sem religion)	12,492,403

(出所) http://www.ibge.gov.br/home/estatistica/populacao/censo2000/populacao/religiao_Censo2000.pdf をもとに筆者作成。

Appendix 5 El clon における主要な登場人物

キャラクター	役	俳優 ⁸
Lucas Ferrer - Diego Daniel	主役 - 双子の兄弟 クローン	Mauricio Ochmann

Jade Mebarak	ヒロイン	Sandra Echeverría
Natalia Ferrer	ルーカスの娘 / アレハンドロの恋人	Laura Perico
Alejandro	ナタリアの恋人	Roberto Manrique
Doña Gloria	アレハンドロの母	Linda Lucia Callejas
Leonardo Ferrer	ルーカスの父	Saul Lisano
Augusto Albieri	医者 / クローン製造者	Roberto Moll
Marisa Antonelli	ルーカスの妻 / ナタリアの母	Andrea López
Enrique	元麻薬中毒者 / 弁護士	Abel Rodríguez
Paula	麻薬中毒者 / フェルナンドの恋人	Andrea Ribelles
Fernando Escobar	麻薬中毒者 / パウラの恋人	Juan David Agudelo
Raúl Escobar	フェルナンドの父	Cristian Tappan
Clara	フェルナンドの母	Claudia Liliana González

(出所) <http://www.rtve.es/television/20100816/clon-ficha-artistica/346949.shtml> をもとに筆者作成。

参考文献

- アンダーソン・ベネディクト . 1997. 『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』 NTT 出版 .
- Araújo, Joel Zito. 2000. *A negação do Brasil : o negro na telenovela brasileira*. Editora SENAC.
- Barbosa, Elizabeth. 2005. *The Brazilian Telenovela “El Clon”: An Analysis of Viewer’s Online Vicarious and Virtual Learning Experiences*. Dissertation. Lynn University.
- Benavides, O. Hugo. 2008. *Drugs, Thugs, and Divas - Telenovelas and Narco Dramas in Latin America* -. University of Texas Press.
- Fadul, Anamaria. 1993. *Serial fiction in TV : the Latin American telenovelas with an annotated bibliography of Brazilian telenovelas*. School of Communication and Arts, University of Sao Paulo.
- 二村久則. 2006. 「南北アメリカのドラッグ・ネットワーク」二村久則・山田敬信・浅香幸枝 (編) 『地球時代の南北アメリカと日本』 ミネルヴァ書房, 123-145.
- Garretón, Manuel Antonio, Martín - Barbero, Jesús, y Marcelo Cavarozzi, Néstor García Canclini, Guadalupe Ruiz - Giménez, Rodolfo Stavenhagen. 2003. Manuel Antonio Garretón (Coordinador) *El espacio cultural latinoamericano : Bases para una política cultural de integración*. Fondo de Cultura Económica.
- Gómez, Jaime. S. 2011. *Telenovelas from the Rio Grande to the Andes : The Construction of Latin American and Latina Identities through Media Production Creative Processes*. Diana I.Rios and Mari Catañeda (eds) Soap Operas and Telenovelas in the Digital Age. Peter Lang. 20 - 36.
- グリオッタ・ガイ、ジェフ・リーン. 1992. 藤井留美 (訳) 『キングズ・オブ・コカイン—コロンビア・メデジン・カルテルの全貌—上』草思社.
- . 1992. 『キングズ・オブ・コカイン—コロンビア・メデジン・カルテルの全貌—下』草思

社.

- Haber, Stephen, Herbert S. Klein, Noel Maurer, and Kevin J. Middlebrook. 2008. *Mexico since 1980*. Cambridge University Press.
- Hamburger, Esther. 2005. *O Brasil antenado : a sociedade da novela*. Jorge Zahar Editor.
- Herold, Cacilda M., 1988. "The Brazilianization of Brazilian television: A critical review". *Studies in Latin American popular Culture*, 7. 41-57.
- Martín - Barbero, Jesús. *Oficio de cartógrafo : travesías latinoamericanas de la comunicación en la cultura*. Ediciones G. Gili.
- . 1997. *Dos meios às mediações : comunicação, cultura e hegemonia*. Editora UFRJ.
- Ponti, Martín. 2001. "Globo vs. Sistema Brasileiro de Televisão (SBT) : Paradigms of Consumption And Representation on Brazilian Telenovelas". *Diana I.Riosand Mari Catañeda (eds) Soap Operas and Telenovelas in the Digital Age*. Peter Lang. 219 - 236.
- Rêgo, Cacilda M. 2003. "Era uma vez...a rede Globo de Televisão". *Studies in Latin American Popular Culture* 22 : 165 - 180.
- . 2011. "From Humble Beginnings to International Prominence : The History and Development of Brazilian Telenovelas". *Rios Diana I.and Mari Catañeda (eds) Soap Operas and Telenovelas in the Digital Age*. Peter Lang. 75 - 92.
- Rincón, Lúcia Helena Afonso. 2005. *Imagens de mulher e trabalho na telenovela brasileira (1999 - 2001) : a força da educação informal e a formação de professoras*. Anita Garibaldi.
- Sinclair, John 2003. "The Hollywood of Latin America : Miami as regional center of television Trade". *Television & new media* 4(3) 211 - 229.
- Straubhaar, Joseph. 1982. "The development of the telenovela as the pre-eminent form of popular culture in Brazil". *Studies in Latin American popular Culture*, 1. 138 - 150.
- . 2010. "Telenovelas in Brazil : From Traveling Scripts to a Genre and Proto - Format both National and Transnational". *Intercom - Sociedade Brasileira de Estudos Interdisciplinares da Comunicação XXXIII Congresso Brasileiro de Ciências da Comunicação - Caxias do Sul, RS - 2 a 6 de setembro de 2010 IV Colóquio Brasil -. EUA de Ciências da Comunicação*.
- Terán, Luis. 2000. *Lágrimas de exportación : una aproximación al fenómeno de la telenovela*. Clío.
- Vink, Nico. 1988. *The telenovela and emancipation : a study on television and social change in Brazil*. Royal Tropical Institute.
- 和田清 . 2000. 『依存性薬物と乱用・依存・中毒』星和書店 .

¹ 基盤研究 (C) 課題番号 22520559 研究課題名「スペイン語・ポルトガル語近親言語文化圏間の外国語教育と相互理解の諸相」(代表・水戸博之) H22-H26。本稿の研究から米墨国境地域の社会状況と麻薬問題に詳しい野内遊が研究協力者として参加した。

² コカインが問題視される最大の理由は、その精神依存形成能である。医師であり、薬物依存の研究者でもある和田清によると、サルを用いた自己投与実験では、比率累進法でのレバー押し回数がコカインでは、6,400-12,800 回にも達している。他方、ニコチンでは、800-1,600 回、アルコール及びモルヒネでは、1,600-6,400 回、アンフェタミンでは、2,690-4,530 回であった (和田 2000 : 138)。

³ 例えば、ブラジルの新興メディア SBT の台頭は、Globo の一極支配の揺らぎを示す事例であるといえる。SBT は、1981 年にオーナーの Silvio Santos 自身が、司会者を務める宝くじの番組を中核にして成長していった。最も重要なのは、1990 年にメキシコ最大のメディア企業である Televisa と提携を結んだことである。この契約で、SBT は、直近 10 年間の Televisa が制作した全作品のブラジル国内における放映とリメイクの権利を得て、La Picara Soñadora (A Picara Sonhadora) を制作した。このドラマの成功で SBT は、Globo の視聴層の多くを獲得した (Ponti 2011 : 225-226)。

⁴ 番組終了時に表れるクレジットは次の通りである。“Una producción RTI Colombia para Telemundo Guión y formato original Globo TV international 2010.”

⁵ この作品が生み出された過程については、Jaime S.Gómezによる“Telenovelas from the Rio Grande to the Andes-the Construction of Latin American and Latina Identities through Media Production Creative Process”に詳しい。

⁶ アメリカ合衆国における最大のスペイン語メディア企業は、Univision である。Univision は、本社はニューヨークにあるが、制作やスタジオは、マイアミ (Doral, Miami-Dade County) でおこなわれている。

⁷ マイアミは、“The Hollywood of Latin America”と呼ばれるほどエンターテインメント産業、とくにテレノベラの制作が盛んな地域である。この点については、John Sinclair による“The Hollywood of Latin America - Miami as Regional Center in Television Trade”に詳しい。El clon を制作した Telemundo も Miami-Dade County に本社がある。

⁸ El clon に見られる南北アメリカを縦断する「汎アメリカ」的特徴として、オリジナルの脚本を書いた Glória Perez や監督の Jayme Monjardim の参加だけでなく、登場する俳優たちの多様な出身地を挙げることができる。主人公であるルーカス役の Mauricio Ochmann とハーディ役の Sandra Echeverría はメキシコ出身、ナタリア役の Laura Perico、マリサ役の Andrea López そしてフェルナンド役の Juan David Agudelo はコロンビア出身、アリビエリ役の Roberto Moll はペルー出身、レオナルド役の Saul Lisano はアルゼンチン出身である。